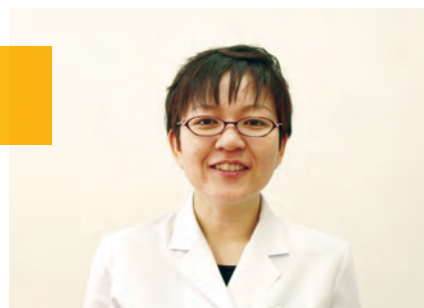


# 在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第26回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



「下の世話を受けるぐらいなら」というキーワードがある。「家族に迷惑をかけたくない」も。今後の療養先を選択しなければならないときに皆の口にはぼる言葉だ。「できれば家ですごしたいけれど、家族に迷惑になるし——」。多くは、そんな文脈になっている。そして、在宅緩和ケアのため自分と同じ年代の患者さんのお宅にお邪魔したときなどに、考えずにはいられない命題が、「私は彼と同じ状態になったとき、在宅療養を選べるか？」。

●  
緩和ケアにかかわり出してすぐのころ、この命題に「yes」と答えられるような仕事をしていこうと自分の中で目標にしていた。始めてから早7年。仕事の後輩たちもできた現在、私には「yes」と答える覚悟はできていない。よけいできなくなったと言うべきか。

サービスを提供している側は、ある意味、優位であり楽だ。最期の時間、弱っていく自分の身を他人に任せるということは、実はそうとうな覚悟がいる。

意識レベルはクリアなのに、身体機能が急速に衰えて、「できないこと」が増えていく自分と向き合える人はそうはいないし、人の手を借りればいと割り切れる人も少ない。過去には手を振り払われたこともあるし、逆に「家族は辛さをわかってくれない。なんとかして助けて」と、泣きながら手を握られたこともある。ましてや自分のパーソナルスペースにずかずか入り込んでくる人間を容認できる人は、当たり前だがさらに少ない。

弱る前から信頼関係があれば——と思う人がいるかもしれないが簡単ではない。「弱った自分を、あるい

は弱った家族を知り合いに見せたくない」という当然の心理が働くからだ。これから地域包括ケアシステムを具現化していく中で支柱となる相互扶助の体制は、サービスを受ける側の心のバリアや、サービスを提供する側の体制づくりを客観的に考えると、人為的に生み出すことはなかなか難しい。地域ケア会議に参加しても、「おかみの言うことは机上の空論だ」とシニカルに笑う町内会役員さんはひとりではない。

●  
サービスを享受する覚悟。それは、自分の足りなさを認容すること、老いを受け入れることと近いのかもしれない。見事に人生をまっとうされたこれまでかかわった方々を思い出すとそんなふう思う。構音障害で会話不明瞭のため声を出しながらないが眼力すさまじく、都度手を合わせて会釈をくれたAさん。「本当に苦しくてどうしようもないときに神様は語りかけてくれる。『愛している』と言ってくれる」と、息も絶え絶えに教えてくれた信仰を持っていたBさん。「自分もお世話になりました。今度は私が皆さんにお返しする番です」と、看護学生の見学を受け入れてくれた元看護師長のCさん。

日本は今、社会全体で老いを受け入れなければならない。それが、地域包括ケアシステムなのだと思う。嫌でも乗る以外ないこうした時代の波が押し寄せている状況にあっては、個人レベルでたくさんの覚悟が必要なのだと感じる日々だ。

いずれ来る最期を自分はどう迎えるのかとともに、仕事をするうえで自分がどうあるべきか、まだまだ方向性すら見つけられずにいる。